
昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました

ちゃんこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました

【Nコード】

N9940Z

【作者名】

ちゃんこっ

【あらすじ】

主人公は、どこにでもいるような学生の振りをしている

その正体は魔界で、漆黒の無双と呼ばれた魔法剣士

ある日、いつも通り学校に登校するが、校門の近くで異変に気付くものすごい数のガードマンがいることに・・・

そして、その中心にあたりには、魔界から逃げ出させてくれた恩人の王妃とその護衛の女騎士団がいた

無視をして、教室に入ったがいいが、最初の授業開始早々王妃が教室に入ってきて、私の王国を助けてくれと言う

主人公は、いくら恩人の頼みでも一度は剣を捨てた
そのことから、一度は断るがドラゴンが現れるとなるとまた、剣を
とり王妃を守る

そのことがきつかけでまだ、主人公は現役、いや、むしろ昔より強
くなっていることを実感する

そして、王妃は助けだしてくれたら一緒に逃げてきた自分の娘をや
ると言い出す

主人公はもちろん断るが王妃は全然聞かず、自分の夫、王が病で倒
れて新しい王になれと言われ

強引に主人公は戦うことになった

もうちょっとだけ、戦うことを決意して・・・

この、小説は一話ずつ視点を変えたりするのでご了承ください。

一応、前書きで部分で誰視点かを書いたりしますので

一話（前書き）

今回は、かみさや神彩けんご剣吾視点です

一話

さて、どうなっているんだ？これは・・・
いつも通り学校に登校しようとしたら、高級そうな車が止まっている
その外にはガードマンが大量にいる
・・・どうということなんだ？
俺には一っだけ心当たりがあったが、俺はそれを無視し裏側の門から入った

【教室】

「なあなあ、あの高級車なんだと思う？」
友人が話しかけてきた

「さあな、誰かお偉いさんでも来ているんじゃないか？」

「お偉いさんって来るわけないだろう？こんな学力とかいろいろ低い学校に」

「そうだよなあ」

一応話を合わせる

心当たりがあるが、もうそれは考えないことにした

キーコーカーコーン

音が割れているチャイムが鳴り響いた

「そろそろ、席に戻ったほうがいいぞ」

「そうだな、戻ることに・・・」

ガラ！

教室の扉が開いた

先生か？と思ったが違った

ヴィクトリア嬢 サーラ

昔、俺を助けてくれた王妃とその女騎士団がそこにいた

ついでに、サーラ王妃の外見は髪はピンク色のきれいな長髪で目は金色、あと背は女性の中で平均的だ

そして、サーラ王妃は俺の近くまで来てこういった

「かみさや けたじ神彩剣吾・・・お願いです、私たちの国を助けてください」

・・・頭を深々と下げて言った

その瞬間、騒いでいたみんなが黙って・・・すぐ騒ぎ出した

「おい！神彩！どういうことだよ！？」

友人が遠くのから話しかけてくる

頭を下げている人は王妃・・・だから王の妻だ・・・

俺はこの人とちよつとしたこと、て言うか俺を魔界から助けてもらった恩があるから大抵のことには手を貸すつもりだが・・・
また、戦うのだけはごめんだった

「何のことだ？ていうかあんたたち誰だ？」

この平凡でささやかな幸せがある生活を終わらせたくない

だから、俺は知らないふりをすることにした

この方法が一番いい

あつちだつて、俺と会うのは7年ぶりぐらいだ

どうせ忘れているに決まっている

だけど、相手は・・・

「いいえ、剣吾・・・いや、またの名を漆黒しっこくの無双むそつのことは忘れたことはありません」

・・・あちゃー完璧に覚えられているな

て言うか、その厨二病くさいのまだ覚えていたんだ

さて・・・どういふ風に対応しよう

そう考えている時だった

「王妃様・・・失礼ですが本当にこの者が助けてくれるのですか？私にはただの凡人にしか見えませんが・・・」

おお・・・言ってくれるねえ

だけど、ここで反論するとめんどくさいことになるから黙っておくか

「黙りなさい、ミララ。この人はあなたなんか一瞬で倒すくらいの魔力の持ち主ですよ」

ミララって言うのか・・・サーラ王妃の後ろで剣を腰につけ、金髪でツインテール、目は青色の女は

「でも、私には感じる事ができないのです。この者の魔力が・・・」

当たり前だ、てめえ程度に感じる事ができたらせつかく抑えているのに意味がねえじゃねえか

ていうか、周りが本当に混乱してきたぞ・・・どうすればいいんだ？これ・・・

別の方法をとろうと考えている時だった

「王妃様！！ばれました！！」

女騎士団の一人が後ろの方で叫んでいる

・・・女騎士団は見たところ5、6人で教室の出入り口をふさいでいる

その後ろの方から声がして・・・ばれた？どういうことだ

「お願いです！！助けてください、剣吾・・・」

「だから、なんのこと・・・」

ドオオオオン！！！！

逆・・・教室の扉とは全く別の方向・・・窓がある方で爆発音が聞こえた

嫌な予感がする

「騎士団！！配置につき、窓を開ける！！何としてでも、王妃に誰一人近づけるな！！」

ミララは叫んで騎士団を動かす

良い判断だな・・・窓がある、と言うことはガラスがはられている。もし、そこから破片が飛び散りでもしたら人が出る

案外、強いのか？こいつら・・・俺みたいに魔力を抑えていたりして

「・・・隊長！！ドラゴンが・・・」

はあ・・・どうやってきたんだよ！！

警官とか何してんだよ！！つて、魔力を持っていないやつに言っても無駄か

多分、姿すら見れてないだろうなあ。て言うか、クラスのやつら写メとるのやめる・・・ちゃんとそいつらはそいつらの仕事しているんだよ・・・お前らは見えてないけど！！

周りは変なものを見るような目で見ていて
さて・・・この間に逃げ・・・

「ギャアアーーーーオオオ!!!」

!!!・・・まじかよ!!!

俺は教室の出入り口と全く別の窓の方に走った
まさか・・・本当にドラゴンが・・・いた
しかも、3体いる

まだ、少し遠いがブレスをしたら当たる距離だ
ちよつとやばいか？

騎士団のやつら剣しか構えていない
このままだと、全滅だな

・・・はあ、今回だけやるか

「はあ、サーラ王妃、今だけは助けてやるよ」

「本当ですか!!!」

「召喚魔法・・・黒魔の騎士」

俺は7年ぶりぐらいに、黒魔の騎士の装備を召喚した

この召喚魔法は自動的に俺に装着してくれて便利だ。あと、サイズは唱えたもののぴったりのサイズになってくれる。まあ、ならなかったら7年前と同じ・・・恐ろしいな高校生が小学生の服を着るようなものになるから、絶対に会わない

ついでに、騎士だから剣もついている。わざわざ剣、単体で召喚する必要がない

まあ、刃がついていないから何も切ることができない剣だけど
ついでに、この装備は魔力がないやつだっけ見える

おかげで、クラスのやつらは目が点になっている
言い訳できないよな・・・

さて、さっさと終わらせて逃げよう
俺は窓から飛び出した

「おい！！なにやって・・・」

ミララは俺に呼びかけるけど俺は

「大丈夫だって、俺飛べるから」

そう、俺は飛べる。昔からなぜか俺は飛ぶことができた
その方法を教えて欲しいとよく言われるけど俺は感覚だけでやって
いるからその方法を教えても誰も飛べなかった
よし・・・そう言えば、この技まだ使えるかな？

「スラッシュ！！」

俺は、技の名前を叫び、剣を振った

この技は、振った剣先から斬撃を飛ばす技だ。ついでに、一番威力
が弱い。あと、剣に刃がついていないと何も切れはしない
だから、威嚇程度・・・だけど十分だ
なぜなら、この技も俺しか使えない・・・未知の技を見たら逃げる
だろ

・ そう思ったが、スラッシュが予想より斬撃を強く飛ばしてしまい・・・

「ギャアアオオ！！」

ドラゴン、一体撃墜してしまった

「（やっちゃまった！！！！）」

できるだけ、傷つきたくなかったのに！

ていうか、死んでないよな！？

俺は殺しとかそういうのは昔からなぜか嫌い……って言うか血を見るのが嫌だ

だから、俺は刃のついていない剣しか持っていない。昔から

多分打撲程度だと思っただが……

昔と今じゃ、全然違うみたいだな

さっきのスラッシュを見ると

「ギャアアオオ！！！！！」

やば……怒りだしたか？

でも、ドラゴンが野生でここに来るはずがない……多分、ドラゴンに誰かが乗っていると思う

引いてくれるだろうと考えていると同時にドラゴンたちは急旋回し、去って行った

……どこから、来たんだ？

魔界の門は人間界でも1個あるかないかだ

その1個がこの王妃様の王国にあったはずなんだけど……

「国を助けてくれて言ったよな？王妃様」

「はい」

「何があつたか、一から話してくれ」

「わかりました。なら場所を変えましょう」

「助かる」

そう言って、俺達は教室から去った

一話（前書き）

今回は、ララミニニララ視点です

一話

納得がいかない!!

なんで、魔力がないやつが空を飛んだり、ドラゴンを倒したりすることができるとだ!

女騎士団が成立して7年・・・最初からいる私からしてみればこの凡人は不思議すぎる。まるであの時の教官みたいだ

女騎士団は、普通の騎士団と比べて魔力が大幅に高い。女王様を守るのも女騎士団しかできない

そんな名誉ある騎士団なのに、魔力がないやつに王妃を守られるなんて・・・あの教官に顔向けできない

昔、私達の騎士団は子供の遊びで設立された

その男の遊び相手が教官だ。その人は尋常じゃないほど魔力を持っていて、どんなに私たちがくじけそうになっても手を差し伸べてくれた。

その人からしてみれば、ただの遊びだったかも知れないけど私たちからしてみれば遊びじゃなかった

そして、私たちはその遊んだその日の内に王妃様に言いに行き、正式に騎士団となった

私たちはうれしかったけど、教官は騎士団成立を知らないいつの間にかいなくなっていた。

全員で町の人に聞き込みをしたけど、意味がなかった

まるで鳥のように空に逃げたのかも・・・そんな考えもつかんだりしていた

あれから、私たちは教官に一度もあっていない

そう言えば、一度だけ王妃様に訪ねた時に王妃様はこんなことを言っていたな

『あの人はあなたたちとはちょっと違うんです。だから忘れなさい』
って言っていた

あの時の私達にはどういうことかわからなかったけど今ならわかる
私はあの人に恋をしていたんだ。子供だからいろんな感情が入り混
じったりしてよくわからなかった
ただ、それだけのことだ・・・もし、また教官に会えたなら伝えよう
『好きです』最初で多分最後の告白を・・・

【神彩劍吾かみさや けんごの家 周辺】

・・・デカいな・・・

この凡人、まさかこんなにもデカい家に住んでいるのか？
ぱっと見ただけでも普通の家3軒ぐらいはあるだろう。

金持ち？なら、王妃様が訪ねてきた理由がわかる

経済的投資か・・・しかも、この凡人ドラゴンを撃墜するほどの力
があるみたいだ

その力で国を取り返し、そして経済もこのものの金でなんとかする
さすがは王妃様だ！！私達みたいなのでは考えようもないことをし
てくれる

だけど、違った

「おい、みんなどっちを見ているんだ？こっちのアパートだぞ。
俺の家」

・・・へ？

右側をゆっくりと見ると、古臭いアパートが立っている
どういうことだ？経済投資じゃないのか・

ますます訳の分からないことになってきた
もう、考えるのはやめよう。すべて王妃様に任せたら今は何とかな
るだろう

私はそう思いながら、神彩とか言うものの家に入ろうしたが・・・

「待った、待った。こんなにも入ることができないんだこの家」

「なら、どうするんですか？ 剣吾さま」

剣吾さま！？ さっきまで呼び捨てだったのに、王妃様がこの者に「
さま」を語尾使う！？

その瞬間、私の何かが行動をさせた

「王妃様！ このものに「さま」なんて使わなくてよろしいです！！」

私は鞘から剣を抜き、この凡人の首元に当てた
もちろん、切れるように刃を表にして

「おっと、怖いな」

嘘だ・・・この凡人は全然怖がっていない

その証拠に、剣を突き付けられて笑っている

本当に八つ裂きにしてやるうか？

そんな考えが浮かんでいた

だけ・・・

「やめなさい、ミララ。さっきのこと忘れたのですか？」

そうだ、よくよく考えてみればこの凡人はドラゴンをいとも簡単に
撃墜していた

ここで、八つ裂きにしようとするれば逆にやられる

私はそう思い、剣を納めた

「でだ、この人数で人目に付かない場所・あるんだけどどうする？」

何を言っているんだ？こいつ

そんないい場所があるなら最初からそこに行けばいいのに

「いいですよ、その場所で」

王妃様は答える

そして、この凡人は手を叩き

「扉の魔法・・・ストラム」

その瞬間、凡人に目の前に現れた

その中は、綺麗な緑色が広がる大地だ

「さて、ここに入るにつれて注意があるんだが」

「なんでしよう」

ここはちゃんと聞いておかないとな

仮にも私は騎士隊長、団で隊長っておかしいと思うけど団長は決まっているから私はその下の隊長だ

だから、この団をちゃんと仕切るためにきいておかないと・・・

「ここにいるモンスターに絶対手を出さないでくれ」

「どうしてだ？」

私は率直な疑問を聞いた

おとなしいからか？それとも、毒か何か持っているのかも、どちらとも違った

「いや、単純にモンスターが強いから手を出さないでくれ。撃退するのめんどいから」

「そうですか、わかりました」

王妃様が答える

・・・強いか・・・

まあ、この凡人は魔力を持っていないからどんなモンスターも強く思えるんだろうな

その点、私達女騎士団は大丈夫だろうな

まあ、この凡人が頭を下げて助けてくれて叫んだら助けてやるかそう思いながら私は扉に入って行った

【神彩 かみさや 剣吾 けんごの扉の世界】

なんだ・・・外から見たのと変わりないじゃないか

綺麗な草原が広がっている

香りがいいな・・・すがすがしい気分になる

ずっとここにいたいなあ。そんな気分になってきた

周りを見ると全員目を細めている。この気分を味待っているのだろうだが、2人だけ違った。凡人ともう、1人新人の女騎士だけが目を見開いて周りを注意深く探っている

こんなところに注意するものなんてないだろ。現に王妃様も目を細めている、いつも注意深いのに・・・

そう考えながら私は目をつぶった

三話（前書き）

今回は、ヴィクトリア＝ミーナ視点です。

三話

え！？え？

なんでみんな知らない土地に来て、そんなに警戒心なくいれるの？
ましてや、注意されたばっかなんだよ？

その人は私と同じで周りを警戒しているみたい
なんだろう・・・私、この人のこと知っているのかな？

最初に会った時から何か、懐かしいものを感じる

でも、気のせいよね、ずっと可愛がられていた私、サーラ母様の娘
ヴィクトリア＝ミーナ

外にも出たことないのに、知っているわけじゃないじゃない

「なあ、お前名前なんていうんだ？」

「！？」

突然、話しかけられた

な、名前・・・そう言えば、まだ自己紹介していない。でも、自分
がサーラ母様の娘っていうのは伏せておこう

まだ、この人を完全に信用したわけじゃないのだから
しかし、どうする？名前を変えるのも抵抗がある

どうしよう・・・

「あ、別に話したくないなら話さなくていいぞ？今、お前だけがま
ともだったから話しかけているだけだしな」

「え？」

私は目を見開いた

私だけ！？騎士団のみんなは！？

女王様を守る女騎士団、私も素性を隠しているけど女騎士団の一人だけ、みんなとは年季が違う

女騎士団設立からいる人もまともじゃない!!

現にミララ隊長も目を閉じている・・・嘘でしょ!?

私は鞘から剣を抜いて、この人に突き付ける

「どうということなの?なんでみんな目を閉じているの?」

威嚇しながら聞く

この人は、確実に私達女騎士団より魔力がある

ドラゴンを撃退した。そして、扉を召喚した

何もかもがおかしい・・・いや、魔力が多すぎるのかもしれない。

この人は・・・

一瞬でも警戒を解けない

もし、解いたならやられるかもしれない

だけど、この人は私を見ずに

「・・・やばいな・・・」

その一言だけ言って飛んで行った

嘘でしょ!?!なんで私は見知らぬ土地で一人だけなの?

いや、正確には周りには、ヒルナやシーナがいる

隊長もいるけど、みんな目をつぶって動かない。しかもたまたま

どうしよう、ここで注意されていたモンスターが出てきたら

そう、考えている時だった

「コフー」

鳴き声が後ろから聞こえた

恐る恐る後ろに振り返ると・・・

イノシシが、立っていた
しかも、棍棒みたいなものを持って
そして、その棍棒を振りかぶり私に・・・
当てるように、振った

ーブーン!!

とっさに、私は剣でガードをしたが・・・

バキン

音を立てて壊れた

この剣は決してもろくはない
ちゃんと毎日手入れをしていた
なのに、一撃・・・私の手もしびれて動かない
足もすくんで動かない

そして、イノシシは私の近くまで来て・・・また、振りかぶった
私は目を閉じてしゃがんだ
そんなことで避けれるわけがない
だけど、とっさに体が動いた
なにもできない。こんなところで私は終わってしまうの？
ゆっくりと私にあた・・・

「はいはい、そこまで!!」

え？だれ・・・？

ドオオオン!!!!

近くで爆発音が鳴り響く

どういうこと？

イノシシの攻撃がいつまでたっても来ない

私はいつの間にか目を閉じていたその目を開けたら

イノシシが倒れていた。しかも遠くの方で

あんなにもぶつ飛ばしたのか？

私の近くにはあの人と女騎士団、あと家が建っていた

目をつぶる前にはこんなものはなかった

・・・まさか

「ここまで運んであいつまで倒すの辛かったぞ？」

本当にやったんだ

こんな人間離れの技

すごい・・・なんて人なんだ

「さて、女騎士団とサーラ王妃を家に運ぶぞ？一応、この家、核兵器使われても壊れないからな」

「・・・名前、なんて言うんです？」

「は？」

突然だけど、気になった

学校で一度サーラ母様が言っていたけど、私は後ろの方にいたからよく聞き取れなかった

だから、もう一度聞きたい。この人の名前

「そうだな。今は漆黒の無双って名乗っておくか」

「どういうこと？」

「お前の国ではこっちのほうが有名だからな」

「知らないわよ、そんな名前」

聞いたことがない、そんな通り名みたいなの
どうして、この人は隠そうとするんだろう・・・まあ、いいや

「私の名前はヴィクトリア＝ミーナ」

「へえ、王妃様の娘か」

「驚かないの？」

女騎士団のみんなは私の正体を明かすと驚いたのに・・・
なんでこの人は驚かないの？

私は、生まれたことすら隠していたのに

「大きくなつたな・・・」

頭の上に手を置かれて撫でられた
気持ちいい・・・ただ、そんな気分になつた

「なんで小さい頃のこと知っているの？」

「お前は覚えてないかも知れないけど、一度だけお前と遊んだこと
あるぞ？」

「え？」

どういうこと？

子供のころ一回も遊んだことはない。いつも勉強や魔法のことをし
ていた

なのに、遊んだことがある？

「もつとも、お前はまだ赤ん坊だったけどな」

そういうことか・・・でも、私を知っているんだ

何者なんだろう・・・この人

母様に頭を下げさせて、国を助けてくれって言わせたり、ドラゴンやイノシシを倒す力を持っていたり・・・何もかもすごすぎる
そう考えながら、私は目を閉じようとしたけど・・・

「おっと、寝るなら。家に入れ。全員入れといてやるから」

「はい・・・」

私は家に入り、靴を脱ぎ、そして、書かれていた自分の部屋に入っ
て寝た

でも、私はまだ気づいていなかった。いつの間にか、私の名前がこ
の人に知られていることに・・・

四話（前書き）

今回は、かみさや神彩けんご剣吾視点です

四話

はあ、やっぱりこうなったか

扉の世界は、召喚したものの望みを反映させる場合が多い
俺の場合、眠たいだ・・・だから、ここに入れば妙な睡魔に襲われる
しかもだ、召喚したものの魔力で強制させられるから、大体は寝る
さらには、モンスターも召喚したものの魔力に反映される・・・
まあ、勝手に家が建つからいいけど、いちいち場所を探さないと
いけないのがきつい
そして、眠たい

「はああ~~~~」

大きなあくびがこぼれる

ここで寝るわけにはいかないんだよなあ
とりあえず、女騎士団を全員この中に入れてその後で、国でも救い
に行かないとな
王妃様に頭下げられたら助けないわけにはいかないからな
さて・・・やるか

数分後

「これで・・・最後つと!!」

1人1人、ソファに寝かせた
鎧を着ているけど、まあぐっすり寝ているから大丈夫だろう
あとは・・・

「扉の魔法・・・ムラトス!!」

開くのが、ストラム。閉めるのが、ムラトス・・・まあ、逆に読めばいいから楽だ

まあ、その場合、他のやつらは扉から出ないといけないんだけど、この場合は閉じ込めるから便利だ

俺の視界では、世界が歪む。そして、扉の外の世界・・・現実が現れる

ついでに、閉じ込めて24時間たてば自動的に召喚したものの近くに飛ばされる

よし・・・閉じ込めたし、ちょっと本気を出して、国を・・・ラーシヤ王国を助けるか

ラーシヤ王国は、日本から俺の速度で、3分程度・・・さて・・・やるか!!!

【ラーシヤ王国】

ドカアアアン!!!

悲鳴が突然飛び交う・・・すべて、兵士の叫びだ

俺としたらこんなめんどくさいことしたくないけど、まあやっといたほうがいいだろ

【王室】

俺はもう、到達していた

あの兵士たちは簡単に倒すことができた・・・正直、弱かった

「アーラ王!!!奇襲です!!!」

「うるたえるな!!!この機会を待っていたんだろ!!!あの女騎士団をつぶす・・・」

「いえ！！敵は・・・」

そして、後の言葉を聞いたアーラ王は言葉を失った
まあ、たった一人でここまでこられたら誰でも失うだろ

「1人・・・だと？」

「はい、しかも男との報告です」

「バカな！！そんなことが・・・」

「ありえるんだよ」

俺は地上から壁になっていた兵士たちを全員ぶっ飛ばして王様みた
いなやつに近づいた
さて・・・とりあえず、本当の王様助けるか

「何もだ・・・貴様！！」

剣を引き抜き、俺に付きたてる・・・俺はその剣を一瞬にして折った
そして・・・耳元でつぶやいた

「前の王はどうした？」

「と・・・とづくに死んでいる！！」

死んでいる？まさか、女騎士団が去った後に・・・

「私たちはここが女が仕切っていると聞いたから攻めてきたんだ！
！」

なるほどな・・・死んでいたのか・・・説明ご苦労さん

なら、予定変更だ。助ける対象の王様がいらないなら、国を助ける

俺は王の耳元でこういった

「ここに来た、兵士を連れてされ・・・一応、言っておくけど一人でも残したら首が飛ぶと思えよ？」

「ヒ・・・ツヒイイ!!!」

醜い逃げ方をして逃げ去って行った

ボエエエエ!!!

・・・多分、今のが合図だな

兵士の魔力が移動を始めた

これで、表面的にはOK・・・

次は、捕えられている。元この国の兵士を助けるか

俺は弱っている魔力を探しだし・・・見つけた

【牢】

ここで、捕えられているみたいだな

「あなたは？」

「・・・まあ、正義の味方かな？」

俺は鍵を探すのが面倒だったから。近くにあったハサミを手に取り・

・

「ちょっと、下がってる・・・スラッシュ!!!」

スラッシュで牢の柵を切り裂いた。

はあ、こういう時だけ切れる刃を持っておいた方がいいと思うな。

俺・・・

「あ、ありがたい。やっと家族に・・・」

「さっさ言っつて言いふらしてくれ。国は救われたと・・・」

「は、はい!!」

みんな一目散に外へ出る

ここで、閉じ込められていたんだ。ストレスが溜まったんだろう
さて・・・ここからは、王妃様の出番だな・・・

俺はそう思いながら、外へ出た。いつの間にか外は夜だ
通りで眠たいはずだ

俺はそう思いながら、王の家・・・城に戻った

そこから、無意識のまま王のベットで寝た

それが、俺の人生で一番、最悪で最高の出来事の始まりだった

五話（前書き）

今回は、かみさや神彩けんご剣吾視点です

五話

「はぁあ~~~~」

俺はあくびをしながら起きた

外はもう、夕暮れだ

ベッド何かきつさを感じる

おかしいな、確か広いベッドで寝たはずんだけどな

俺は目をこすりながらベッドを見直した

そしたら・・・

数人の女子・・・ああ、そう言えば扉にいれっぱなしだったな

24時間たつて出てきたのか・・・って、この国どうなったんだろう

一応、昨日の内に助けたんだけど、でもその後どうなったか知らない

ちよつと、様子見に行くか

俺はそう思いながら、部屋を出ようとした

その時、不意にドアが開いた

誰だ？

そこにいたのは・・・

「おはようございます・・・新しき王」

「は？」

俺は耳を疑った・・・て言うか、目も疑った

俺の目が正常なら目の前には、メイド姿の女性がいる

俺の耳が正常なら、メイドは俺のことを『王』と呼んだ

・・・あれ？

「ああ、起きましたか」

横から、サーラ王妃が出てきた

いつの間に・・・

てつきりベッドにいて思っていた

「どういうことだ？サーラ王妃？」

「いやー、あなたが王になってくれた方が安定しそうだから国民に
言っちゃった」

・・・まずい！！！！サーラ王妃・・・酒を飲んでいる！！！！

サーラ王妃は酔ったら何をしでかすかわからない・・・ついでに、
俺が最後に見た時、絡み酒になっていつてうっとうしかった
と、とにかく、王になるのはごめんだ！！逃げないと・・・

「あ、ついでに、前の学校には退学届。住んでいた場所はもう引き
払って、あと銀行に溜めていたお金はすべて寄付したから」

・・・

「うそだろおおおおお！！！！！！」

早い！！早すぎる！！！！対応がいくらなんでも半日以下ではできな
いことをやっている！！！！

クソ！！！！ここまで、追い詰められているのかよ！！！！俺・・・
金もない、住むところもない、学校も退学。

どうやって、これからの就活すんだよ

「あと、私の娘の・・・」

「ああ、ミーナだっけ」

「そうそう、その子と将来的には結婚してもらおうから」

「じゃあ、この書類にサインを・・・」
「やっつけられるか!!!」

俺は魔力を開放して、空を飛んで逃げようと思った
だが・・・

「・・・あれ？」

おかしい、何かがおかしい
体の何かがおかしい？なんだ？

「逃げられないわよ？だって、寝てる間に・・・魔力吸い取っちゃ
ったから」

しまったー！！！！そうだ、この国、魔法関係なら世界一
俺の魔力を吸い取るのも造作もないはず
起きている俺ならなんとかするけど、寝ていたらなすがままだ！
つち！！奥の手を使うか？
いや、・・・この場合は、諦めたほうがいいか・・・
けどなあ、王になるものいやだ

「なんで逃げようとするのよ？」

「ああ？」

「だって、王だよ？自分の好き勝手にできるのよ？こんな千載一遇
「黙れ!!!」

自分でもびつくりするほどの大声がでた
だけど、許せない・・・

「王妃・・・いや、サーラ！！あんたはそんなふうにならなくていい

のか!？」

「ち、ちが・・・」

「違わねえだろ!! あんたは・・・」

「合格です」

「あ!？」

「どういうことだ?合格?」

「これで、文句はないですね?ミーナ」

「はい」

後ろから、声が聞こえた

まさか・・・この人達・・・

「試したのか?おれを・・・」

「そうです、ミーナがどうしても言うから仕方なく・・・」

「その割には、俺の魔力を」

「だって、逃げられたら駄目じゃないですか」

いつの間にか口調が戻っている

はめられた!!しかも、最悪だ!!

逃げられないし、はめられた・・・完璧に踊らされた

くそ、ちよつと考えればわかることなのに・・・

「だれか、助けてくれーーーー!!!!!!!!!!」

五話（後書き）

次から、ちょっとわかりにくかったりするかもしれませんが、わかりにくかったらすぐさま言ってください。できるかぎり迅速に対応するつもりですので、

六話（前書き）

今回は、**ララミ**＝**ミララ**視点です

六話

はっ！！聞いてあきれろ！！

まさか、魔法関係の問題が解けないとは、ふぬけだな

この凡人はやっぱり王になるには、駄目な存在なんだろう

「はあ、体動かしてえ〜」

「駄目だ！誰が何のためにこんな基礎の問題をやっているとおもんだ？」

私はなぜか教育係に抜擢はってきされた

正直なところさっさと終わらせたい。しかし、王妃様の命令では背くことができない

まあ、私ができる限りはやってやろう

「っで、こんどはどこがわからないんだ？」

「寝かせてくれええ〜」

・・・やりすぎてしまったか？

私が教育係に抜擢されて三日間ずっと眠らせずに勉強させているけど、効率が悪いか？

人に教えたことのないのに、なんで私がこんなことをやっているの
だろう？

「・・・はあ、魔力も回復したし、本気で逃げようかな」

「そうだ、良いこと考えたぞ」

閃いた、こいつが私を見下しているのと、こいつの体を動かしたい
という要求に見返ることができる考えを

「私と一騎打ちしないか？」

「・・・本気で言っているのか？」

目を見開いて、私に問い詰める
ふん。そんな脅しが私に聞くか

「本気だ」

「・・・まあ、準備運動ぐらいにはなるか」

なめられたものだな・・・仮にも私はこの王国では剣の達人として
名を知られている

そんな、私に準備運動ぐらい・・・ふふ、たのしみだ

ガキイン!!!!!!

「はあはあ・・・嘘でしょ？」

こんなにも強いのか？

今私・・・いや、私たちは戦っている

私達っていうのは、ここに来るまででこいつが女騎士団の暇なやつ
を誘い、一緒に戦っているが・・・こっちは6人いるのに・・・

「息ひとつ切れてないなんて」

「強すぎない？この人・・・」

近くにいる、マジシャン「ヒルナも嘆いている

「はあ！召喚魔法・・・ケルベロス!!」

ヒルナの得意な召喚魔法で最も強力なケルベロスが召喚される
首が三つに分かれている犬、速さも力も十分だ
これなら、こいつも多少は・・・

「・・・ケルベロスか・・・」

一子相伝の強力な魔法がこいつに襲い掛かるが・・・

「よっこいっしょ!!」

ドカツ!!

殴った!!首の一つを殴り飛ばし、平然と立っている
そして・・・ケルベロスは消えて行った

「え?」

ヒルナは何がおこったかまだ分かっていない
・・・くそ!!ここまで実力の差があるか?
私たちは女騎士団・・・あの人が帰ってくるまでは、王妃様を守る。
・・・絶対に!!

「はあ!!女騎士団!!一気に行くぞ!!」

「「「「はい!!」」」」

私以外の騎士団が返事をした
それと同時に私たちは魔法を唱え始めた
6方向からの一斉魔法攻撃
さすがに、これは防ぎきれないだろ

「・・・本当に、準備運動くらいか」

ヒュン!!

・・・え？

こいつが何かつぶやいてからいなくなった
どこに行った？

私は周りを確認すると・・・

「・・・」

ヒルナが目を見開いて空中を見ている
私もそれにつれてみると・・・

六話（後書き）

ありがとうございます!!!

皆様のおかげでこの小説のお気に入り登録が10件を超えました!!

それじゃあ、次回で・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9940z/>

昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました

2012年1月6日18時56分発行